

## 第一章 光る源氏の物語 薫の成長

[第一段 柏木一周忌の法要]

故権大納言のはかなく亡せたまひにし悲しさを、飽かず口惜しきものに、恋ひしのびたまふ人多かり(故権大納言がはかなく亡くなりなされた悲しさをいつまでも残念に慕い懐かしむ人は多いのでした)。

六条院にも、おほかたにつけてだに、世にめやすき人の亡くなるをば、惜しみたまふ御心に(六条院源氏殿に於かれても全般に於いて優れた人材が亡くなるのを惜しみなさる御心だが)、まして、これは(ましてこの故権大納言は)、朝夕に親しく参り馴れつつ、人よりも御心とどめ思したりしかば(日頃から親しく出入りして懇意で特に目を掛けていらしたので)、いかにぞやと、思し出づることはありながら(どうしてあんなことをと思わずにはいられないことはあるものの)、あはれは多く(印象深く)、折々につけてしのびたまふ(折々につけて思い出さいます)。

\*御果てにも(御一周忌法要でも)、誦経など(読経の布施など)、取り分きせさせたまふ(格別に弔問なさいます)。\*「果て」はく四十九日または一周忌の忌明け法要>とのこと。四十九日法要は柏木巻末に、非常に分かり難くてそれと断定できないながらも、それがあつたらしい記述があり、その後の日の経過を語っていたようなので、此处では一周忌法要のことらしい。

よろづも知らず顔にいはいけなき御ありさまを見たまふにも(何も分からない顔で幼い様子の若君を御覧に成るにつけても)、さすがにいみじくあはれなれば(殿は実父である故大納言が憎いながらも非常に不憫で)、御心のうちに、また心ざしたまうて(御内心でだけで実子からの分としてのお布施をお考えになって)、\*黄金百両をなむ別にせさせたまひける(黄金百両を別に布施なさいます)。大臣は(おとどは、父大臣の藤原殿は)、心も知らでぞかしこまり喜びきこえさせたまふ(事情も分からず格別の御志と恐縮し感謝申し上げなさいます)。\*「黄金百両(こがねひゃくりゃう)」は江戸時代の話をおもわせて意外だ。貨幣経済の当時の実態が分からないし、と言っても江戸時代の実態も分からないが、それでも江戸時代とは単位や貨幣規模や価値自体も違った筈だ。

大将の君も(大将の源君も)、ことども多くしたまひ(お布施を多く包みなさって)、とりもちてねむごろに営みたまふ(特に篤く弔問なさいます)。かの一条の宮をも(未亡人の一条宮も)、このほどの御心ざし深く訪らひきこえたまふ(この法要での御志は特別な反物を奉って御見舞申しなさいます)。

兄弟の君たちよりもまさりたる御心のほどを(弟君たちよりも篤いお布施に)、いとかくは思ひきこえざりきと(これほどとは思い申しなかつたと)、大臣、上も、喜びきこえたまふ(父大臣も母上も感謝申し為さいます)。亡き後にも、世のおぼえ重くものしたまひけるほどの見ゆるに(御長子が死後にも世の評価が高くていらっしゃるのを見るにつけても)、いみじうあたらしうのみ、思し焦がるること、尽きせず(御両親は非常に惜しがり深く悲しまれることがいつまでも尽きません)。

[第二段 朱雀院、女三の宮へ山菜を贈る]

山の帝は(入山された朱雀院は)、二の宮も、かく人笑はれなるやうにて眺めたまふなり(二の宮もこのように傍目に不幸な境遇で沈んでいらっしゃるようで)、入道の宮も(入道の三の宮も)、この世の人めかしきかたは(普通の人らしい幸せな生活とは)、かけ離れたまひぬれば(かけ離れていらっしゃるので)、さまざまに飽かず思さるれど(それぞれに不満にはお思いになるが)、すべてこの世を思し悩まじ(何もこの世を恨むまい)、と忍びたまふ(と受け止めなさいます)。

御行なひのほどにも(御勤行をなさる時にも)、「同じ道をこそは勤めたまふらめ(三の宮も同じように修行していることだろう)」など思しやりて(などと思ひ遣りなさって)、かかるさまになりたまて後は(宮の出家後は)、はかなきことにつけても(特に用事がなくても)、絶えず聞こえたまふ(頻繁にお手紙をお送り申し為さいます)。

御寺のかたはら近き林に抜き出でたる\*筍(お寺のすぐ近くの林に生えたタケノコや)、そのわたりの山に掘れる\*野老などの(その辺りの山で掘れたトロロイモなどが)、山里につけてはあはれなれば(山里らしい風情があるので)、たてまつれたまふとて(三の宮に贈って差し上げようというので)、御文こまやかなる端に(お手紙を情愛こまやかに書きになった端に)、\*「筍」は「たかうな」と読みがあり、それは「たかむな」の音便と古語辞典にある。が、タケノコを「たかむな」と呼ぶ由来は不明とのこと。ただ、「たかんな」と言ってしまうと「竹の菜(食用の竹)」のように聞こえる。\*「野老」は「ところ」と読みがありくヤマノイモ科の蔓性(つるせい)の多年草。原野に自生。葉は心臟形で先がとがり、互生する。雌雄異株。夏、淡緑色の小花を穂状につける。根茎にひげ根が多く、これを老人のひげにたとえて野老(やろう)とよび、正月の飾りに用い長寿を祝う。根茎をあく抜きして食用にすることもある。おにどころ。>と大辞泉にある。ざつと小さなヤマイモか。ところで、トコロというトコロテンが想像され、トコロテンは海藻のテングサを煮溶かしたものだそうだが、同じような保水構造の多糖類にコンニャクがあり、コンニャクはコンニャクイモを煮てアルカリで凝固させるらしく、蒟蒻芋を「野老」というのかとも思ったが、丸で別の植物らしい。で、もっと単純に、トロロミたいにトロツとしたものをトコロと言った、というのはどうだろう。トコロテンもトロツとしたものを天突くみたいな。

「春の野山、霞もたどたどしけれど(春の野山は霞ではっきり見えませんが)、心ざし深く掘り出でさせてはべる(あなたへの思いの深さははっきり分かるように、土を深く掘って取り出させたものでございます。)しるしばかりになむ(ほんの御するしに)。

世を別れ 入りなむ道は おくるとも 同じところを 君も尋ねよ (和歌 37-01)

どうせ決心したのなら、早く形も付けましょう (意識 37-01)

\*もう、トコロを贈った時点で「所」を詠み込むのはネタバレ気味だが、期待に違わず「同じところを」と掛けてある。歌筋はく出家は私より遅れたが同じように極楽を目指してあなたも修行に励んでください>という挨拶程度のものに見える。で、出家者が勤行に励むのは当然の日課なのだろうが、父の朱雀院が娘の三の宮にく私と一緒に歩もう>と言うことはく早く六条院源氏殿との生活を忘れて、私のところに帰っておいでなさい>と響くし、その心算で詠んでいる、ということの意味してしまう。

\*いと難きわざになむある(とても難しいことです) \*注に<歌に添えた言葉。極楽往生は難しいことをいう。>とある。確かに、そういう表意だろうが、別居するには男の子なので子別れとなる、という難しさを意味しているのだろう。

と聞こえたまへるを(とお書きになっぺいらっしやるのを)、涙ぐみて見たまふほどに(宮が涙ぐんで御覧になっぺいる時に)、大殿の君渡りたまへり(六条院源氏殿がお見えになりました)。

例ならず(いつもと違っぺ)、御前近き\*櫛子どもを(宮の前にある筍や山芋が盛られたいくつかの台を)、「なぞ、あやし(おや、何だろう)」と御覧ずるに(と殿が御覧になると)、院の御文なりけり(朱雀院からの贈り物とお手紙なのでした)。見たまへば(お読みになると)、いとあはれなり(胸に染みます)。 \*「櫛子(らいし)」は<高坏(たかつき)に似た縁の高い器。酒や菓子などを盛った。>と大辞泉にある。「高坏」は<食物を盛る、高い足つきの小さな台。古くは主に土器であったが、のちには木で作り、漆塗りなどを施すようになった。角(かく)高坏と丸高坏とがある。腰高(こしだか)。たかすき。>とある。贈り物のタケノコやヤマイモが盛られた漆器なのだろう。

「今日か、明日かの心地するを(今日か明日かの命の気がするのに)、対面の心になはぬこと(会えないもどかしさよ)」など、こまやかに書かせたまへり(などと情こまやかにお書きあそばしていらっしやいました)。

この「同じところ」の御ともなひを(この御歌にある「同じところ」という御連れ立ちの句は)、ことにをかしき節もなき聖言葉なれど(出家者であれば当たり前の励行言葉だが)、「げに(なるほど)、さぞ思すらむかし(そうお思いに成るのも当然だ)。我さへおろかなるさまに見えたてまつりて(宮の御世話をお任せ頂いた私をして、その持て成しが十分には至らないようにお見せ申し上げて)、いとどうしろめたき御思ひの添ふべかめるを(相当にご心配をおかけ申してしまったようで)、いといとほし(実に申し訳ない)」と思す(と殿はお思いになります)。

御返りつつましげに書きたまひて(宮はお返事を謹んで丁寧にお書きになっぺ)、御使には(御文遣いには)、青鈍の綾一襲賜ふ(青ねず僧衣の綾織の一揃いをお与えなさいます)。書き変へたまへりける紙の(下書きなさった紙が)、御几帳の側よりほの見ゆるを(御几帳の横からちらりと見えたのを)、取りて見たまへば(殿が手に取っぺ御覧になると)、御手はいとはかなげにて(御字はとても弱弱しく、こうあります。)、

「憂き世には あらぬところの ゆかしくて 背く山路に 思ひこそ入れ」(和歌 37-02)

「今さらは辛い憂き世の表町」(意訳 37-02)

\*注に<女三の宮の返歌。「野老」を受けてそのまま、「世」は「憂き世」、「道」は「山路」と言い換えて返す。「ところ」は「野老」と「所」の掛詞。>とある。「憂き世」は<辛い現世>だが、明らかに今の<六条院暮らし>を示す。源氏殿は面目無いし、朱雀院は面映い。

「うしろめたげなる御けしきなるに(院はあなたをご心配していらっしゃるご様子なのに)、このあらぬ所求めたまへる(此処とは違う所へ行きたがりなさるとは)、いとうたて(心外で)、心憂し(気になります)」

と聞こえたまふ(と殿は申しなさいます)。

\*今は、まほにも見えたてまつりたまはず(殿は宮に今では直にはお会い申しなさらず)、いとうつくしうらうたげなる御額髪(御几帳越しのとても可愛らしい宮の前髪や)、面つきのをかしさ(お顔の美しさが)、ただ稚児のやうに見えたまひて(まるで子供のようにお見えになって)、いみじうらうたきを見たとまつりたまふにつけては(非常に可愛い姿でいらっしゃるのを押し申しなさると)、「など、かうはなりにしことぞ(どうしてこんなことになってしまったのか)」と、罪得ぬべく思さるれば(と自分の至らなさの所為だったのかと責任を感じなさって)、御几帳ばかり隔てて(几帳一つの隔たりが)、またいとこよなう気遠く(更にこの上なく余所余所しく)、疎々しうはあらぬほどに(薄情にならないように)、もてなしきこえてぞおはしける(接し申し上げなさいます)。\*「今はまほにも」は注に<出家後の女三の宮は源氏とは几帳越しに対面する生活となっている。>とある。物理的には難なく破れる障害を取って犯さないのが教養人の証みたい。しかし実際の所、核実験のスイッチを押した者が、ロケットのエンジンを点火した者が、空爆で町を焼いた者が、屠殺場で肉を捌いた者が、家の冷蔵庫の女房のプリンに絶対に手を付けられないことで社会の平和が保たれている、というのは本当かも知れない。身分秩序が崩れたように、そういうアメリカ文化もやがて崩れるか。いやしかし、実は身分秩序は変容しただけで少しも崩れていないのだろうか。どちらにしても、何となく怖い話だ。

### [第三段 若君、竹の子を噛る]

若君は、乳母のもとに寝たまへりける(若君は乳母の横で寝ていらっしゃったが)、起きて這ひ出でたまひて(起きて這い出しなさって)、御袖を引きまつはれたてまつりたまふさま(殿の袖を引っ張ってまつわり付きなさる姿が)、いとうつくし(とても可愛らしい)。

白き羅に(しろきうすものに、白い透き織の衣着に)、唐の小紋の紅梅の御衣の裾(唐織の小紋柄の紅梅色の上着の裾を)、いと長くしどけなげに引きやられて(とても長くぐずぐずに引きずって)、御身はいとあらはにて(前がはだけて)、うしろの限りに着なしたまへるさまは(背中だけで着ていらっしゃるさまは)、例のことなれど(いつものことだが)、いとらうたげに白くそびやかに(とても幼げで色白ですらりとして)、柳を削りて作りたらむやうなり(柳を削って作った人形のように)。

頭は露草して(かしらはつゆくさして、髪の毛は露草のように瑞瑞しく)ことさらに色どりたらむ心地して(特に黒々と色艶が良く)、口つきうつくしう\*にほひ(口元は可愛らしく愛嬌があつて)、まみのびらかに、恥づかしう\*薫りたるなどは(目が大きく優れた気配がするのは)、\*なほいとよく思ひ出でらるれど(やはりとてもよく似ていると故大納言が思い出されるが)、\*「匂ふ」は<内面の美しさなどがあふれ出て、生き生きと輝く。>と大辞泉にある。「にほふ」は<丹延ふ>か、とも古語辞典にある。\*「薫る」は大辞泉に<よいにおいがする。芳香を放つ。>や<煙・霧・霞(かすみ)などが、ほのかに立つ。立ちこめる。>や<顔などが華やかに美しく見える。つややかな美しさが漂う。>などとあり、好ましい気配

が辺りに広がる、ような語感。\*「なほいとよく思ひ出でらるれど」は故大納言を思い出しているものと補語するが、是は本文でもく(よく)似たりと故大納言を(思ひ出でらるれど)>とあるべきもののように思えてならない。言ってもしょうがないが、こういう省略文は気に入らない。

「かれは、いとかやうに際離れたるきよらはなかりしものを(彼はとてもこのように際立った美しさではなかったものを)、いかでかからむ(どうしてこの子はこんなにも良い顔立ちのだろう)。宮にも似たてまつらず(宮にも似申していらっしゃらず)、今より気高くものものしう(今から気高く立派で)、さま異に見えたまへるけしきなどは(特別な容姿に見え為さる姿などは)、わが御鏡の影にも似げなからず(自分の鏡に写った姿にも似ていなくもない)」見なされたまふ(とお思いになります)。

わづかに歩みなどしたまふほどなり(若君は少し歩き始めたところです)。\*注に<薫、この時満一歳一か月。>とある。先に故大納言の一周忌法要の話題があり、大納言は二月に没したので、今は年が改まったの二月ということに成るようだ。若君は一月生まれなので、確かに<この時満一歳一か月>らしい。

この筥の櫺子に(このたかうなのらいしに、近くのタケノコの盛り台に)、何とも知らず立ち寄りて(若君はそれが何か分からずに近付いて)、いとあわたたしう取り散らして(辺り構わず取り散らかして)、食ひかなぐりなどしたまへば(食いかじりなどしなさるので)、

「あな、らうがはしや(いや大変だ)。いと不便なり(具合が悪い)。かれ取り隠せ(それを片付けなさい)。食ひ物に目とどめたまふと(食べ物に目がなくて卑しいと)、もの言ひさがなき女房もこそ言ひなせ(口の悪い女房が言いかねない)」とて、笑ひたまふ(と殿は笑いなさいませ)。

かき抱きたまひて(そして若君を抱き上げなさって)、

「この君のまみのいとけしきあるかな(この子の目はとても独特だな)。小さきほどの稚児を、あまた見ねばにやあらむ(小さい子供を余り見ないからだろうか)、かばかりのほどは、ただいはけなきものとのみ見しを(これくらいの内はただあどけないものとばかり思っていたが)、今よりいとけはひ異なるこそ(今からとても気品が格別なのは)、わづらはしけれ(気に成るところだ)。

\*女宮ものしたまふめるあたりに(桐壺女御の第一内親王が住んでいらっしゃる近くに)、かかる人生ひ出でて(こういう色気のある男御子が生まれ出て来て)、心苦しきこと(気掛かりな事が)、\*誰がためにもありなむかし(誰にとっても起こりそうだ)。\*「をんなみや」は注に<明石女御腹の女一の宮をさし、紫の上の養女となって六条院に住んでいる。>とある。若菜下巻三章一段に「春宮の御さしつぎの女一の宮を(皇太子のすぐ下の女一の宮を)、こなたに取り分きてかしづきたてまつりたまふ(紫上は東の対に引き取って大切に御養育なさいませ)。その御扱ひになむ(その御世話焼きで)、つれづれなる御夜がれのほども慰めたまひける(遣る瀬無い殿の夜離れのほども慰めなさいませ)。いづれも分かず(紫上は桐壺女御の御子たちを、分け隔て無く)、うつくしくかなしと思ひきこえたまへり(いとしくかわいいと思ひ申しなさいませ)。」とあった。是は三年前の冷泉帝から今上帝への御世代わりがあった年の暮れの話であり、その御世代わりに際して秋口なのだろうか、「六条の女御の御腹の一の宮、坊にみたまひぬ」(若菜下巻二章一段)とあって、一の宮は当時6歳だったので、この「御さしつぎの女一の宮」は当時4,5歳くらいだったのだろうか。であれば、今は7歳くらいか。\*「たがためにも」は注に<女一の宮と薫をさす。>とあり、此処の文意について『集成』は「冗談ながら、暗に柏木のような恋愛事件を

起すのではないか、という含みがある」と注す。>とある。が、含みということなら、「心苦しきこと」は広く色恋沙汰>を言っているのであり、「誰がためにも」も広く守役の女房も含めて、むしろ源君と藤原姫との関係に藤原殿が困惑したようなことまでも含めて、それこそくいろんな人に迷惑が及びかねない>と言うことで、この場の多くの人の含み笑いを誘う言い回しの冗句になっているのだろう。

あはれ(でも私は)、そのおのおのの生ひゆく末までは(そのそれぞれの子たちが成人に達するまで)、見果てむとすらむやは(見届ける事ができるのだろうか)。\*花の盛りは、ありなめど(花の盛りはあるのだから、それを見れるかどうかは分からない) \*「花の盛りはありなめど」は<「春ごとに 花の盛りは ありなめど あひ見むことは 命なりけり」(古今集春下、九七、読人しらず)>と参照指摘がある。「命なりけり」の「いのち」は<運命、天命>。この歌は柏木巻五章三段で大将が女二の宮の母御息所に贈歌する際に運命の出会いを演出しようとして言った「あひ見むことは」にも引かれていた。

と、うちまもりきこえたまふ(と見守り申しなさいませう)。

「うたて、ゆゆしき御ことにも(まあ縁起でもない)」

と、人びとは聞こゆ(と女房たちは申します)。

御齒の生ひ出づるに食ひ当てむとて(若君は生え掛けたむず痒い歯に噛み当てようとして)、笥をつと握り待ちて(タケノコをそのまま離さず握り持って)、雫もよよと食ひ濡らしたまへば(よだれをたらたらと垂らしてかじり濡らしなさいませう)、

「いとねぢけたる色好みかな(タケノコを乳房代わりにするとは、また物好きな色男だな)」とて、

「憂き節も 忘れずながら 呉竹の こは捨て難き ものにぞありける」(和歌 37-03)

「タケノコの憂き世知らずの甘い味」(意識 37-03)

\*注に<源氏の独詠歌。「憂き節」は女三の宮と柏木の密通事件をさす。「こは」は「これは」の意と「子は」の掛詞。「節」と「竹」は縁語。「今さらに何生ひ出づらむ竹の子の憂き節しげき世とは知らずや」(古今集雑下、九五七、凡河内躬恒)。>とある。引き歌は「古今和歌集の部屋」サイトの解説に<竹の縁語で「節」と「よ」(＝竹の節と節の間)を使って、タケノコはまだ節がないので「そんな世だと知らないのか」と詠ったものである。>とあって、大喜利物の味わいだ。で、当歌も少なくとも表意は冗句で<やがて浮き出る節を忘れた訳でもないだろうが、まだ節の無いタケノコは捨て難い食材だ>と殿が若君に話し掛けることで、見守る女房たちが笑えた、という場面なのだろう。また複意も<辛い世の中だが子は尊い>という一般論が先ずは成り立つ。その味わいで、この句が大人の鑑賞に堪える、というところか。

と、率て放ちて、のたまひかくれど(と殿は若君をタケノコから引き離して抱き寄せて話し掛けなさいませうが)、うち笑ひて、何とも思ひたらず(若君はただ笑って何も分からず)、いとそそかしう(すぐ別のものに目移りして、とても忙しなく)、這ひ下り騒ぎたまふ(殿の膝から這い下りて動き回りなさいませう)。

月日に添へて(月日が経つほど)、この君のうつくしうゆゆしきまで生ひまさりたまふに(この若君は可愛らしく不吉なほどに美しく成長なさって)、まことに(本当に)、\*この憂き節(冗談交じりで詠んだ「この憂き節」という句に込めた宮と督の密通の忌まわしさを)、皆思し忘れぬべし(殿は全て忘れてしまいそうでした)。 \*「この憂き節」は此处でこそ「憂き節」は女三の宮と柏木の密通事件をさす。>という注の指摘が生きる。

「この人の出でものしたまふべき契りにて(この人がお産まれ為さるべき宿縁として)、さる思ひの外の事もあるにこそはありけめ(あのような意外な密通があったのだろう)。逃れ難かなるわざぞかし(全てが宿命だったのだ)」

と、すこしは思し直さる(と殿はこの辛い事情も少しは考え直すことが出来ました)。みづからの御宿世も(それにしても御自分の人生に)、なほ飽かぬこと多かり(不満は多いのです)。

「あまた集へたまへる中にも(大勢集まっていらっしゃる妻たちの中でも)、この宮こそは、かたほなる思ひまじらず(この宮こそは少しも身分に劣る所がなく)、\*人の御ありさまも、思ふに飽かぬところなくともものしたまふべきを(その御生活も不足無く過ごしていらっしゃるのが当然なものを)、かく思はざりしさまにて見たてまつること(このような思い掛けない尼姿でお見受け申し上げるとは)」

と思すにつけてなむ(とお考えになるに付け)、\*過ぎにし罪許し難く(過去の自分の軽々しさが許し難く)、なほ口惜しかりける(やはり後悔を覚えます)。 \*「過ぎにし罪許し難く」は注に<『完訳』は「密通の罪。前の「すこしは思し直さる」から反転、無念に思う」と注す。>とある。が、この文は「みづからの御宿世もなほ飽かぬこと多かり」を受けているので、自分の罪の後悔なのではないか。宮に対してなら「罪許し聞こえ難く」とかになりそうだし。ただ、その過去の罪が、結婚したこと自体なのか、紫の上を実質で正妻として扱い続けたことなのか、正直言って熱愛できなかったことなのか、それら全てなのか、その辺は分からない。